

「子どもが増えた！」

子どもが増えた！



「暴言市長」のもう一つの「顔」

湯浅誠・泉房穂
編著
光文社新書
税別980円

明石市
人口増・税収増の
自治体経営
湯浅誠 泉房穂 養育助介
村木厚子 藤田浩 清原慶子
北川正徳 さかたけん

「火付けてこい」「燃やしてしまえ」と職員に暴言を吐いて退職を迫られ、一躍知名度を上げた市長がいる。泉房穂・元

兵庫県明石市長である。だが、明石市に活力を生み出したのも同じ市長である。「なぜできたのか」と6人の識者が次々泉さ

内を語る。8年近くの任期中に、明石市を大変わりさせたのは確かなことだから。

「子どもを大切に」という公約を軸に、第2子以降の保育料の無償化、子ども医療費の無料化、保育園の増設、全小学校区にこども食堂設置などの施策を推進、「子育てにやさしいまち」というブランドを地域に浸透させた。

その結果、周辺からファミリー層の転入が相次ぐとともに出生率も高まり、人口と個人市民税が増えた。画期的なことだ。店舗への聴覚障害者向けの筆談ボードやスロープの導入などバリアフリーの効果も大きく、商店街に賑わいをもたらす。全国に先駆けて認知症診断費用の無償化にも乗り出す。

鼎談者で地域エコノミ



んに問いかけ、施策を掘り下げたのが本書だ。

進行役として各鼎談の

舵を取った生活困窮者支援のプロ、湯浅誠さんは、本書の印刷直前に起きた暴言事件に悩む。冒頭で「人は多面的な存在。事件で政策を否定するのはフェアではない」と胸の

「地域共生都市」の格好のモデルに

ストの第一人者、藻谷浩介さんに「度肝を抜かれた」と言わしめるほどの乳幼児増加率の高さだ。元厚労省次官の村木厚子さん、東京都三鷹市長の清原慶子さん、元三重県知事の北川正恭さんなど論客が体験を踏まえながら、明石市の政策を多角的に論じ合う。なかなか巧みな構成だ。

なかでも、地域おこし研究者の藤山浩さんの「一人ひとりの力を0・5、0・3と足上げて仕事をまたいで補い合う」とする考え方に説得力がある。高齢者でも0・3なら働けるし、生きがいにつながる。

人口減、少子高齢化にお手上げの自治体にとって明石市は格好のモデルとなる。高齢者ケアの目標だった「地域包括ケア」が「地域共生社会」への転換を求められ、子どもや障害者、貧困家庭などを含めた「丸ごと」志向の時代である。その具体策は、同時期に発行された泉さんの著書「子どものまちのつくり方」に詳しい。慶応大学の井手英策教授が7人目の共鳴者として登場。本書と合わせ読んで読むと理解が深まる。